おバカ姫とワガママ王子

いーちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おバカ姫とワガママ王子

【Ｎコード】
Ｎ１６６０Ｚ

【作者名】
いーちゃん

【あらすじ】
恋愛未経験のルイ。
ワガママ王子の潤。
二人の恋の物語。

恋がしたい！

「うーーーーーー！恋がしたーい！」
私の投稿してからの第一声がこれだった。

私は七海ルイ。
華の高校一年生。
自分で言うのもなんだけどかなりモテる。
振った男は星の数。
……ってなわけあるか～！
…はい。ハジメノ四行以外全部嘘です。
彼氏いない歴１６年だぜ。
まあ威張ることではないのですが。
というか私のコンプレックスなのですが。
私は小、中と女子校育ち。そのため、近所ノ友達が続々と彼氏をつくる中私は男の子に対する免疫がないため一人おいてけぼりに。
つまり恋も未経験！
流石に危機を感じた私は初の教学デビューを果たしたという訳…なのですが。

俺様君登場！！

また始まったよ、ルイの病気。」
彼女は莉子。通称りっちゃん。私の大親友！
「病気じゃないもん。願望だもん。」
「どっちでも一緒だって。」
いや、かなり違うと思いますけど。
「大体、ルイはカワイイのにそのおバカな言動のせいで彼氏できないんだよ。」
「マジ！？私ってそんなにバカ！？」
「自覚なしかよ・・・。まあとりあえずルイは大人しくしてろ。そしたら普通にカワイイから。」
「はーい。おっ、千ヶ崎君おはよ！」
千ヶ崎君が教室に入ってきた。
千ヶ崎君は学校でも1，2を争うイケメン。
誰にでも優しいクラスの委員長。
「七海さん、おはよう。」
ほら、あんま喋ったことない私にも優しい。
「ルイさ、千ヶ崎君とかどう？」
「へ？どうって？」
「だから、ルイの彼氏候補。千ヶ崎君なら優しいし、カッコイイからあんたとつり合いとれてちょうどいいかもよ。」
「うーん。千ヶ崎君って私にとって恋愛対象じゃないんだよね。」
「ふーん。まあ彼氏は自分で見つけな。それが一番だ。」
「アドバイス、サンキュー！」

その日の休み時間。
私は購買でパンを買いに行った帰りで食べるのが楽しみでそればかり考えていた。

その時だった。
「おい、そこの女どけ。俺が通る。

勝負開始！！

知らない男子だった。
ムカッ
「なによ！なんか用？自己ちゅー君。」
相手も反論されるとは思ってなかったらしく一瞬驚いたような顔をした。
でもすぐに言い返してきた。
「はあ？お前何様だ？この俺様に盾突こうってのか？」
「だったら？大体あなた今時一人称が俺様なんて古いわ。時代遅れもいいとこだわ。それともなに？
あなたそれがカッコイイとか思ってんの？だったらはっきり言うけどそれ、ダサいわよ？」
ぶちっ！
何かがキレる音がした。音の正体は明白だった。
「よーし、そのその度胸だけはほめてやる。今日の放課後屋上に来い。勝負つけようじゃねえか。」
「いいわよ。そのかわり、私に恐れをなして逃げないようにね、俺様君！」

あいつの正体

「っていう訳なの！もう超ムカつく！」

「・・・ルイ、その男子なんて名前か知ってる？」

「へ？知らないよ？」

「だよね・・・。まったく、あんたはまためんどくさい奴に喧嘩吹っ掛けて・・・。」

「え？りっちゃん俺様君知ってるの？」

「うん。ってか私はあんたが知らなかったのにびっくりだよ。ま、ルイそういう情報疎そうだもんねぇ。多分だけどそいつ、風間潤だよ。」

「かざまじゅん？」

「そう。なんか親がうちの学校の理事長やっててすんごい金持ちらしいよ。スポーツ万能で、成績も学年1位。おまけにイケメンときてるから、女子の彼氏にしたい人？、1だって。私はそうは思わないけど。」

「ふーん。面食いのりっちゃんでもヤなんだ。」

「当り前よ。私には森山君が一番かっこいい・・・って何言わせんのよ！！」

「イッヒッヒ。赤くなっちゃって～。カワイイ。まありっちゃん森山君ラブだもんね。」

説明しよう！森山君とはりっちゃんの彼氏のイケメン君なのだ！・・・大親友でさえ彼氏がいるというこの虚しさ。

「ま、まあそれは置いといて。ルイ、結局どうすんの？」

「どうすんのって？」

「だーかーら！風間君のこと！行くの？行かないの？」

「そんなの行くに決まってんじゃん！売られた喧嘩は買っとかないと！」

「買っとかないとっていうルイの考えはよく分かんないけど・・・。まあとりあえず、行くならルイ、気をつけなさいよ。風間潤って実際かなりかっこいいらしいから。惚れないようにね。」
「おす！！」

勝負の内容

そして放課後。
若干の遅刻。
りっちゃんと喋り過ぎたか。
屋上のドアを開ける。
「遅かったじゃねえか。てっきり逃げたのかと思ったぜ。」
開けると同時にあいつの声がする。
「ふん。逃げる訳ないじゃない。私、売られた喧嘩は買う主義だから。」
「随分と強気じゃねえか。お前、俺が誰だかわかってるのか？」
「分かってるわよ！風・・・風・・・風車？」
「違げーよ！俺は風間潤だ！」
「そう、それ！」
「馬鹿かてめーは？まあいい。とりあえず勝負といくか。」
「勝負って何すんの？」
「どちらかがどちらかに惚れたら負けっていうゲームだ。どうだ？」
「いいでしょう。そんな勝負、この七海ルイにかかればお手の物だ！明日からの勝負、楽しみにしてなさい！」

ーーーーかくして私とあいつの勝負が始まったんだけど・・・。

作戦その1

翌日の昼休み。
「ふっふっふ！どうだ、風間潤！」
屋上で私が見せたのは手作り弁当。
手作り弁当を「はい、あーん。」とやられて落ちない男はいない！
朝、五時起きで作った。
かなり眠いけど、風間潤を惚れさせるためには仕方ない。
「・・・は？」
「は？じゃなくて、どう？」
「どうって・・・。何で弁当？」
「何でって決まってるじゃない！あんたを落とすための・・・。」
危ない危ない。
自分から暴露するところだった・・・。
「俺がどうかしたのか？バカ女。」
「んだとこの野郎ー！」と、言いたい所だが、抑える。
「何でもないよ？それよりも、はい、あーん？」
「お前さっきと態度違っーーー！」
何か言いかける風間潤の口に無理やり卵焼きを押し込む。
「どう？おいしい？」
「ゲホ・・・、ゴホ・・・。てめえ、何すんだ！死ぬかと思っただろ！？・・・ん？・・・美味い・・・。」
「よっしゃあーーー！」
・・・素に戻った。
「おーい、素に戻ってるぞー。あーあ。折角、心が傾きかけたと思ったのにこれじゃあダメだな。」
「ええええええーーーーー！！！」

作戦その2

放課後。
作戦その1は失敗したが、今度こそ！と、思い風間潤と一緒に帰る事に。
・・・何話せばいいのかわかんない！
話題がない！
パにくりすぎてなんだかよくわかんなくなってきた・・・！
そもそもなんで私、こいつと帰ってるわけ！？
誰か助けて～！
ヘルプミー！！
「・・・おいっ！バカ女！黙ってないでなんか喋ろ！気まずいだろうが！」
「だーかーら！私はバカ女じゃあないって言ってるでしょ！？」
「馬鹿じゃねえか。敵に作戦ぶちまけたり、人の名前間違えたり。これのどこが馬鹿じゃないんだ？」
「うっ・・・。」
「だろ？」
「そーですよ！どうせ私はあなたのように頭も良くないし、運動できないし、ルックスだって全然可愛くないですよ！」
「へー。よく分かってんじゃん。素直でよろしい。」
「ふん！じゃあね、私、こっちだから。」
「一人で帰れるか？」
「馬鹿にするなー！」
「はいはい。じゃあな。・・・あ、そうだ。」
少しから歩いて風間潤が振り向いた。
「お前さっき、自分の事全然可愛くないとか言ってたけどな！お前、結構かわいいと思うぜ！」
それだけ言って歩き出す。

風間潤が見えなくなるまで立ち尽くしてからふと、我に返って気づく。

頬が赤くなっていることに。

「・・・馬鹿・・・。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1660z/

おバカ姫とワガママ王子

2011年12月29日23時54分発行